

第五に学部の違いを越えた学生間の交流があります。学部がかわれば考えかたや感じ方も異なるということが判れば、それが広い視野をもたらすと同時に、それに基いた新しい人間関係の芽生えをも体得できるかもしれません。

お上の提供するものにろくなものはないという真理を信奉している諸君、それはそれとして一度参加してみませんか。窓口は学生掛です。

昭和62年度宿泊研修実行委員長 やまぐち いわお ロシア語

Peace now! 私の戦争体験(2) 京大生協平和のための委員会 1982年11月8日付。

私にとっての戦争

国民学校のこと

昭和十六年、国民学校と改称された時が私の入学の年だった。京城府、今のソウルにあった西大門公立国民学校である。その年の十二月八日、日本は真珠湾を攻撃、鬼畜米英を撃滅するための教育が本格的に始まった。今思えば植民地だった為に、軍国主義教育は一層激しい形をとったのだろう。

学校を入ると先ず御真影を収めた奉安殿に最敬礼、道を歩いていても何をしていても、正午のサイレンが鳴り出すと、立ち止まって一分間の黙祷。そして毎月一回は南山の中腹にあった朝鮮神宮と京城神社に参拝して皇軍の武運長久を祈り、所定の用紙に判をもらって提出する。これが私たち大日本帝国の少国民たるものの最低の義務であった。

二年生の頃からよく先生に殴られていたが、三年生になると連帯責任と称して、クラスの誰かのやった些細なことが口実となって、最低日に一回は殴られていたように思う。私は運悪く級長をやったり副級長をやったりしていたので、殴られる率も級友たちに較べると格段に高かった。多勢の生徒を殴るのであるから先生も手が痛くなるとみえ、中には革のスリッパを脱いで両頬をひっぱたくのもいた。

戦局が頓に悪化するにつれ、防空壕掘りや畑作りも銃後の少国民の任務となった。遠足は遠足とは言わず行軍と称された。日の丸弁当以外は禁止で四kgの砂袋を背のう(実はリュックサック)に入れて徒歩五里。これはさすがに落伍者が相ついで。

四年生になると戦況益々芳しからず、いつでも退避できるように、上下足兼用で足にゲートルを着用ということになり、午前中三時間算数、午後三時間国語という決戦教育に切替えられた。それも右肩から炒米などを入れた救急袋、左肩からは教科書を入れた鞆をたすきに掛け、更にその上から防毒マスク入りの袋をかけて、背中には防空頭巾をさげる。といういでたちで授業を受ける訳である。机の上には必要なものしか出してはならなかった。

それでも私たちは、こういう生活をいやいややっていた訳ではなかった。戦前の状況については断片的にしか覚えていない世代であったから、戦争目的についての疑問など、ある筈がなかった。たとえアッツ島が玉砕しようと、サイパン島が玉砕しようと、最後には必ず神風が吹くことを、堅く信じて疑わなかったのである。

「内鮮一体」の中味

仲のよい友人の中には朝鮮人もおり、家にもしげしげと出入りしていたが、内鮮はもとより一体であって、等しく陛下の赤子(せきし)であったから、この友人やその家族が日本に対してどんな思いをしているかなどということは、考えてもみたことはなかった。

そして昭和二十年八月十五日。敗戦の日である。電車通りは「マンセイ」と絶叫する人波で埋まり、それは二日二晩続いた。三日目には仁川に上陸した米軍が京都市内に進駐し戒厳令を布告した。午後八時から翌朝五時まで、理由なく外出する者は射殺する、というのである。マンセイ騒ぎが収まったので、恐る恐る外に出て驚いた。つい二、三日前まで青山だの金田だのとなっていた標札が、軒並み金だとか朴だとかに変わってしまっていたのである。創氏改名を強いたことによって朝鮮の人々がどんなに心を傷つけられたかに思い至るのは、ずっと後のこ

とであって、この時には正直いって何か大変口惜しい思いをした。

朝鮮人の友人の家に行くと、ここも金という標札になっていた。この家の人々はインテリで、田舎から来ていた何人かの女中の外は、皆流暢な日本語を話していたのであったが、その日に限って言葉がさっぱり通じない。子供心にも変だと思っていると、父親が出てきて倅はいないという。これからどうなるか予測がつかないという当時の状況の中では無理からぬ事ではあったが、あんなに親しくしていたのに、という想いは長く消えることがなかった。そのような印象を消すことができたのはやはりずっと後になって、朝鮮に対して日本が何をしたかを知るようになってからである。

引揚げ

九月になって引揚げることになったが、父は既に結核性膿胸で病床にあり、母は心臓を悪くしていた。それで労働力となるのは当時二十歳の姉と私だけであった。私は父と母の薬だけをリュックに山のように詰めて、父の手を曳き、汽車に乗った。

引揚げの途中にも実にさまざまなことがあったが、その中でも忘れられないのは広島のことである。列車がふと止まったので乗っていた貨物車の扉をあけてみると、かわらが一面に散乱して積重なっている — とみえたのがプラットホームだった。屋根は勿論ない。誰かが広島だという。目を挙げると、ただ一面の瓦礫が山まで続き、ところどころに建物の残骸や木がみえる。これが原子爆弾かと思っていると、はっと気がついた。どの木も申し合わせたように片側だけ真黒になっているのに、片側はあおあおとしているではないか。抜けるような青空と太陽の下に立つその緑の瑞々しさに対して感じたその時の怖ろしさは、時を経た今も消えることがない。

父の故郷に落着いて二ヶ月後に父が死に、それから五ヶ月後には母も世を去った。そしてその時から私の戦後がはじまった。

やまぐち いわお 教養部助教授